

全国中国語教育協議会

ニューズレター

第8号

1998年9月10日発行

98年度第2期セミナーの受付を開始 会報への積極的な寄稿を期待する

前号ニューズレターにおいて、春に開催された全国中国語教育協議会第1回理事会での決定に基づく今後の活動方針等を9月発行予定のニューズレターに掲載するとしていたが、事務局の事情で11月末までに発行する第9号に、99年度の活動計画案とあわせて掲載することとした。すべては事務局の力不足によるものであるが、会員各位におわび申し上げる。

98年度第1期セミナーと夏季セミナーは予定通り終了した。今号ニューズレターのp.4に後者の報告を掲載した。前者の報告は、前後してしまっただが次号に予定している。

98年度第2期セミナー(教員研修)は、すでに予告した通り下記の日程で開催する。

理事各位からは、会員すべてが活動に参加できる工夫が求められている。前号では会員各位の積極的な投稿をお願いしたが、99年度以降のセミナーでは経験交流会の要素を加味した形式も取り入れた具体案を検討している。中国語の教室における実際的な問題をテーマにして、出席者全員が意見や質問を出し、講師が助言とともに取りまとめをする方式が考えられる。これまでのセミナーも、一方通行ではあるが、続けていきたい(関光豊)

98年度第2期セミナーのご案内

10月17日(土) 中国語発音教育の経験から 講師:孫玄齡氏(東京外語大)

11月14日(土) 基礎段階のガイドライン(語彙編)[仮題] 講師:山田真一氏(高岡短大)

12月12日(土) 基礎段階のガイドライン(文法編)[仮題] 講師:古川裕氏(大阪外語大)

☆11月と12月は、初級段階の語彙と文法で「教えるべきこと」の範囲を具体的に示す。

各回とも午後1時半から4時半まで。会場は98年度第1期と同じく、(財)国際文化フォーラム会議室(新宿第一生命ビル26階 ⇨交通:JR新宿駅西口下車徒歩10分)です。

98年度第2期セミナー申し込み方法

葉書に10月、11月、12月など、参加希望の月と、氏名・連絡先(住所)、所属、中国語教育歴をお書きの上、右記の事務局へお送りください。定員は各40名、先着順です。受講料の事前納入振込用紙と交通案内を郵送します。受講料は各回¥2,500ですが、同時申込みは、2回=¥4,500、3回=¥6,500となります。

事務局のご案内

156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部中国文学研究室内

全国中国語教育協議会

郵便振替口座 00120-0-364168

(会費・寄付金振込にご利用下さい)

お問い合わせ・ご連絡等は、お手数

でも必ず郵便でお願いいたします。

漢語教師進修班 (北京語言文化大学)



中国語教育関係の研究会やシンポジウムの紹介を連載しているが、第3回は日本大学の久米井敦子氏に今夏の報告をお願いした。⇒ 7/14～8/7の4週間、漢語教師進修班に参加した(筆者は事情で第一週を欠席したが)、参加者は30名(18カ国、日本人は筆者を含め2名)、授業時間は全49コマである。開設科目名及び担当者、コマ数を以下に挙げる。(50分×2=1コマ、○内の数字はコマ数)

語法教学⑦(呂文華)	語音教学⑦(劉広徽)	詞彙教学⑤(程娟)
漢字教学③(張静賢)	聴力教学②(楊惠元)	口語教学②(楊惠元)
閲読教学②(陳賢純)	教材教学④(劉詢)	漢語提高③(田善継)
報刊教学②(劉士勤)	工具書紹介②(王恩保)	中国宗教②(韓経太)
園林芸術②(鄭春苗)	唐詩鑑賞②(彭慶生)	書法絵画①(馬振声)
H S K 紹介①(郭樹軍)	京劇芸術①(楊惠元)	計算機多媒体紹介①(張普)

中国語教学関係の科目では、「語法」と「語音」は試験があり、重点科目とされていた。「語法」は、「詞類」、「詞組」、「句法成分」、「句子的分類」、「幾種特殊的動詞謂語句(‘是’字句、‘把’字句など)」、「動作的態」、「比較的方法」の7項目からなる大綱が配布され、その中の一部、例えば、補語や「把」字句、動作態など、教学上問題が生じ易い事項についての講義であった。「語音」は、筆者がもっとも啓発を受けた科目で、いかに学生に自然で流暢な発音をさせるかが重点だった。特に語調(イントネーション)の重要性が強調された。単語、あるいは文のどこにアクセント(重音)を置いて読むか、その法則を講義し、練習した。教養課程の第二外国語が多数を占める日本の中国語教育では、一つ一つの漢字の声調を正確に読むことを教えても、文を自然に読むことまでは授業では教えられないのが現状かもしれないし、それを論じた教材も少ない。また、他の科目は講義を聴くことが中心だったのに対して、「語音」は受講者も声を出し、発音練習や書き取りの小テストなどが課せられ、厳しく発音矯正もされた。なお、補助教材として『漢語普通話語音辨正』(李明他編著・北京語言文化大学出版社)が使用された。その他の科目は詳述できないが、講義形式で、教学という立場で各分野について論じたものだった。ただ、「漢語提高」は、東西の文化・習慣のちがいをテーマに皆で自由に討論するという少し趣向の変わったものだった。

文化関係の科目はいずれも初歩的な解説で、「園林芸術」の後で頤和園見学や、「書法絵画」の後の書法の実習など、講義の後に見学や実技の時間が設けられた。

その他印象に残ったのは、「教室では、教員は演出家、学生は役者である」「教室ではなるべく多く学生に話す機会を持たせる」と、複数の教員が言ったことだ。

残念だったのは、教学経験、教育対象、教員自身の背景(非漢字文化圏の外国人、漢字文化圏の外国人、華人)の違う参加者が、「外国人教師」という共通項でだけくくられ、1クラスにまとめられたことだ。クラス分けが考慮されてもいいと思った。

知識の獲得、交流、語学力の向上、それらの意味で、有意義な研修であった。

『会員寄稿』

前号ニューズレターで会報への寄稿を求めたところ、早速に数点の原稿が届いた。今回はその内の1点を掲載する。今後の応募は下記カコミ内の募集要項をご参照いただきたい。

文献紹介(VT法について)

藤井 玲子 (お茶の水女子大学大学院)

30年以上にわたって、日本人にフランス語を教えているVT法の実践者であるロベルジュ氏は、日本語には日本人自身も意識しない日本語のリズム、イントネーションの特質というものがあって、それを身につけることが発音教育においては非常に重要であるとして次のように述べている。

リズム・イントネーションは言語習得において最も重要な音声要素なのです。まずリズム・イントネーションを習得して、その後に語彙・形態・文法が定着するのです。この二つの要素がなければ言語を学習し、記憶し、定着させることはできません。

日本人に中国語の発音を教えている時、個々の音は決して誤ってはいないのに全体として聞くときどうも中国語らしくないという事があったり、どの日本人学習者も同じような間違いを犯す、パターン化した傾向があると感じる事がないだろうか。ロベルジュ氏は、言語のリズムは身体の周りにある空間との関わり合いから生まれる運動と不可分の関係にあるとして、リズム知覚のために、身体リズム運動を採り入れたり、象徴的にリズムが統一性を与えたものとしてのわらべ歌を活用したりする。

ある言語特有のリズムから、その言語の音素が生まれてくると言った方が事実に近いのです。

と主張する氏は、乳児の発する喃語の観察によってもそれが認められるとし、日本人の子供の喃語には普通の日本語には見られない音がありながらも、それが日本人のものであるとの識別率は73%であったことから、判断の基準はリズムであると言う。周波数の低い部分で感じとられるX語らしさの習得というものが発音指導において重要であるとの見解は興味深い。ちなみに中国人の子供が発する喃語を識別する実験では、85%という高い識別率を得たという事実は、VT法の中国語教育への応用の可能性を示唆するものと言えないだろうか。

参考文献：『日本語の発音指導-VT法の理論と実際』クロード・ロベルジュ他 1990 凡人社
『話し言葉指導の技法-リズムと身体の発見』クロード・ロベルジュ監修 1995 第三書房

中国語教育協議会 会報(ニューズレター)・研究論集 原稿募集

- I 会報掲載原稿 ①教室での工夫・授業のアイデア ②教学実践記録 ③国内外の中国語教育・研究関係学会・研究会・シンポジウム紹介 ④私の読んだ本 ⑤その他。
字数制限：1編1千字以内。手書きの場合は400字詰め原稿用紙。ワープロ使用可。
締め切りは特に設けないが、事務局で採否を決め、随時掲載。原稿は返却しません。
- II 研究論集収録原稿 ①中国語の教授法、教育内容、教育方法等に関し、実践的な内容を含むもの ②辞書・教材等に対する具体的な意見・主張 ③基礎文法項目・基礎語彙表の作成および批判 ④試験問題と学力評価に関し、具体的な内容を含むもの ⑤中国語教育に関する書評、読書ノート ⑥その他、実地の体験に基づく実践的研究。
必ず1行20字づめで400行以内(400字原稿用紙20枚相当)。ワープロ使用。締め切りは1999年1月15日、原稿2部に400字以内の要旨1部を添えて事務局に郵送。99年度公開。

⇨第2回中国語教員夏季セミナー報告⇩

今年度の夏季セミナーは事務局の事情等で7月末の1日のみという日程であった。時期的な理由であろうが、参加者がやっと20名に達したという次第で、今後の計画立案に若干の不安を感じさせるものがあった(経費の点では20名をこえる参加が望ましい)。

以下に、島田亜実氏(東京外国語大学)の筆で、夏季セミナーの内容紹介を掲げる。

◇渡邊晴夫氏(國學院大)「外国語の評価とテスト—英語と中国語の場合」

評価とは何か、テストの種類、良いテストの条件、テストの目的……といった、テストの基本的な概念やあり方という大きな枠組みから、テストについての研究が先行している英語教育の成果を取り上げ、中国語との対比を含めて解説された。

例えば、良いテストの条件として、1)妥当性(そのテストは正確に何を測定しているか、そのテストはいかに適切に測定しているか) 2)信頼性(採点が客観的にできる、繰り返し行っても同レベルの(同一の)受験者が同レベルの得点をする=まぐれ当たりがない。など) 3)実用性(実施容易性と採点容易性)の3つがまず挙げられる。さらに、配点やレイアウト、返し方に至るまでテスト問題を評価する場合の細かい注意点を述べた上で英語の読解力テストの実例を挙げて、具体的にどの点が不十分で、どの点がうまく考慮されているかを解説された。

普段、小テスト・定期テストを作り、学生の評価をしながら、そのテスト自体の評価には漠然とした知識しか持ち合わせていなかったということをあらためて確認すると同時に、体系的な知識を得られる貴重な講義であった。

◇武信彰氏(明治大)「中国語試験問題の作り方—良問・悪問—客観式検査法を中心として」

客観テスト(4択問題)を中心に、便宜的に既出の大学入試センター試験、大学入試、各種検定試験を材料として、悪問・愚問を切り捨てていく。具体的にaからzまでの失敗パターンを設け、その設問がどの点で悪問とされるのかを解説された。以下はその中のいくつかを掲げる。

- a 形式を整えることだけに精力を使い、遊びに走る(4択の選択肢の例)
- c 設問の意図が判然としない(たんなる計算問題になっている例)
- g 長文問題の題材文が、受験者に対して幼すぎる/予備知識で大意がつかめる
- i 受験者の思考の流れを全く考慮せずに考えられた選択肢
- j 中国語が不適格(出題者自身の文法理解の不足を感じさせるもの)
- k ピンインの扱いに考慮が足りないもの
- p 指示文が難解で受験者が迷うもの
- u 実質的に4択といえないもの(2箇所のチェックポイントを置き、2×2式の単純な作りの選択肢を4つ設ける、4番目がでたらめなど)
- w 選択肢のうち正答が突出しているもの(正答が一番長いなど)

講師の独特の語り口が辛辣なことを言っても嫌みに聞こえず、「わあ、こんなひどい問題がある」などと笑い声がもれる講義であったが、我にかえって自分自身の作題を思い起こしてみると、大変身につまされる内容であった。

以上、渡邊氏の講義で大枠に沿った知識を、武信氏の講義では具体例を得られる、という組み合わせとなっていたが、ただ、受講者からは普段の小テストや定期テストの具体的な作成法のアドバイスが欲しかったという声も聞こえた。